

## 平成26年度卒業式 学長式辞

愛媛大学長 柳澤 康信

ただいま、1,818名の皆さんに学位記を授与いたしました。卒業される皆さんに心からお祝いを申し上げます。「おめでとう。」

本日の式典には、先ほど紹介させていただきましたように、愛媛県の各界を代表する方々、そして愛媛大学にゆかりの深い諸先輩に来賓としてご臨席を賜りました。お忙しい中、ご臨席いただいたことに厚くお礼を申し上げます。また、本式典にご出席のご家族、関係の皆様に対して、心よりお慶びを申し上げますとともに、日頃から本学に対するご理解・ご支援に対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

卒業される皆さんは、在学期間中にそれぞれいろいろな困難や苦労があったことと思います。それを克服して今日の佳き日を迎えるに至った努力を讃えたいと思います。皆さんが自分の苦難を振り返ってみると、そこには必ず、家族、友人、先輩や後輩、指導教員などの温かい支援や助言があったはずです。それらの人たちへの感謝の思いを今一度自分の胸に刻み付けて、これからの人生の糧にさせていただきたいと思います。

皆さんの大部分は、就職し、社会に巣立って行くわけですが、大学卒業は人生の大きな節目であり、未知なる新しい社会への船出でもあります。この節目にあたって、自分が今までに身に付けた知識や技能を再確認し、これからの目標をしっかりと立て、その目標に向かって努力することを改めて心に誓って下さい。また、331名の卒業生は大学院に進学し、勉学活動が続けることとなりますが、大学院に進学することも社会に巣立つのと同じように、大きな節目であります。大学院では学部での勉学と質的に違う深い研究能力と広い領域の知識の修得が求められます。社会に巣立つにせよ大学院に進学するにせよ、常に学ぶ姿勢を保ち続け、これまでに培った「知の力」をさらに向上させて頂きたいと思います。

愛媛大学では3年前の平成24年に、愛媛大学学生として期待される能力として「愛大学生コンピテンシー」を制定しました。この「愛大学生コンピテンシー」は新入生にパンフレットを配って周知するようにしていますが、卒業生の皆さんにとって少し馴染みが薄いかもかもしれません。この「愛大学生コンピテンシー」には、「5つの能力」が掲げられていますが、そのうち、これから社会にはばたく皆さんにとって特に重要だと思われるのは、「多様な人とコミュニケーションする能力」と「組織や社会の一員として生きていく能力」の2つの能力だと思います。これらの能力は「社会的能力」と言い換えることができます。皆さんはすでにこれまでの大学生活の中で、例えば、所属する研

研究室の中で、あるいはサークル活動によって、リーダーシップ、協調性、あるいは対話や討論する能力などを高めてきたと思いますが、その能力が十分に身に付いているかどうか本格的に問われるのはこれからです。

さて、人間は「社会的動物」だと言われます。今日（きょう）、私は皆さんに、私の専門分野である行動生態学の視点から「ヒトが本来的に備えている性質、すなわちヒトの本性が、どのように進化してきたのか？」というテーマについて述べてみたいと思います。

皆さんもご存知のように、現存している動物でヒトと系統的に最も近いのは、チンパンジー、ボノボ、ゴリラ、オランウータンの4種を含む類人猿の仲間です。ヒトが類人猿と進化的に分かれたのは600万年ほど前だと考えられています。ヒトとアフリカに住む類人猿3種には、近隣の集団と明確な境界をもつ社会集団のなかで生活してきたという共通点があります。したがって、そのような社会集団のなかで暮らすという生活様式は600年以上続いたと考えられます。

京都大学の総長に就任した山際寿一さんはゴリラ研究の第一人者ですが、長年、野生のゴリラの群れに入り込んで調査をしています。彼は、ゴリラには相手が何をしたいのか、自分が何を望まれているかを汲みとり、どういう態度をとるべきなのか判断する能力が高いことを確信しています。また、ゴリラの子どもたちはまるでレスリングごっこのように取っ組み合ってよく遊びますが、遊んでいるときによく笑うそうです。遊ぶというのは、実はけっこう高度な能力です。相手を傷つけたら遊びになりませんし、体格の差があっても成り立つようにしなければなりません。遊びが成り立つということは、そのためにはどのくらいの力加減だったらいいかと判断する能力や、相手の気持ちを汲む能力が高いということです。

このように、共感する能力や他者の視点を取得する能力は、ヒトに特有の能力ではなく、類人猿も十分に備えていることが明らかになっています。それでは、行動面でヒトに固有だと言える特徴は何なのでしょう。類人猿との比較研究や原始的な生活を営んでいる狩猟採集民の調査によって最近明らかになってきた重要なポイントは、ヒトは集団内ではきわめて「平等主義的」であったということです。

人類学者でありチンパンジーの研究者でもあるクリストファー・ボームは、『モラルの起源』という最近の著書において、ヒトが狩猟採集を行う生活様式のなかで平等主義的な基盤が形成され、その過程においてヒト特有の良心や道徳観が生じたという興味深い仮説を提示しています。このボームの仮説を紹介しましょう。

ヒトは20万年前にはすでに体の作りは現代人と同じになっていました。その時代、彼らは複数の家族からなる20～30人ぐらいの小さな集団で暮らし、動物を捕まえたり

植物の実などを採集したりして生活を営んでいました。彼らにとって、良質のタンパク質や脂肪分に富んでいる大型の哺乳類はとくに貴重な食料であり、チームを組んでこれら大型動物の狩りをして、キャンプ地にもち帰ってから獲物を解体していました。ある研究者は、石包丁で解体された 20 万年前の獲物の骨に刻まれた切り傷の角度から、獲物の解体には定まったルールがあり、選ばれたひとりの人に任されていたと推測しています。現在、世界各地で原始的な生活を営んでいる狩猟採集民では、獲物の解体は獲物を捕まえた人とは違う人によって行われ、肉はみんなに行き渡るように平等に分配されます。この習慣は 20 万年前にすでに確立していたと考えられています。

少なくとも 20 万年前から農耕が始まる 1 万年前まで、ヒトは、獲物の分配に見られるように、集団の構成員のなかに明確な上下関係などの序列が存在しない平等主義的な狩猟採集民であったと考えられます。現代の狩猟採集民の大半はこのような平等主義的な暮らしをしています。そこでの調査によれば、その社会はけっして平和で争いごとがないユートピアではありません。そこには厳しいルールが存在します。集団内の平等性を保つために、不正な手段で獲物を捕ったり、騙したりする者は構成員に非常に嫌われ、仲間はずれや追放などの処分を受けます。また、自分の力を誇示して他の者を力によって押さえつけて利益を独り占めするような横暴な者も非常に嫌われ、集団の構成員がみんなまで連携してその暴君を集団から排除し、場合によっては殺すことすらあるそうです。このような社会では、逸脱した行動を行った者を処罰するのは平等の秩序を維持するための共通のルールになっています。

ボームは、ヒトはこのような社会的環境に適応して、集団のルールや価値観が個人の感情面でも結びついて内面化したと考えています。内面化とは、自ら進んで集団のルールに共鳴するようになり、それを破ると恥ずかしいと感じ、それに従っていると満足を覚えて誇らしく感じるようになることです。これは、現代の言葉で表現すれば、「良心をもつようになった」と言えます。ボームは、これと同時に、われわれが今日「羞恥心」あるいは「善」や「徳」と呼んでいる道徳的観念が生じ、今日の人間の本性の基本的な部分を形作ったと推定しています。ヒトの社会において、自分の利益を犠牲にしてまで他の人のために尽くすという利他行動が発達したのは、ヒトが道徳的観念をもつようになって集団のなかで利他行動が高く評価されるようになったからだ、ボームは考えています。

このボームの説を参考にして、皆さんが社会人になったときに必要とされるリーダーシップをどのように理解したら良いのか少し考えてみたいと思います。ボームの話の中にはリーダーシップという言葉は一度も出てきませんでした。平等主義的な狩猟採集民にとって横暴なリーダーは秩序を乱す排除すべき存在でした。それではそのような

社会ではリーダーは存在しなかったのでしょうか。けっしてそうではないと思います。一口にリーダーと言ってもいろいろなタイプがあります。リーダーと言うととかくトップダウン型のリーダーや牽引型のリーダーを思い浮かべますが、いま企業などで注目されているのはサーバントリーダーです。サーバントリーダーシップとは、聞き慣れない言葉かもしれませんが、「集団や組織のメンバーを支援して目標達成に導く奉仕型のリーダーシップ」のことです。愛媛大学では来年4月に新しい学部「社会共創学部」を設置する予定にしていますが、この学部の人材育成のキーワードはまさにこのサーバントリーダーシップです。サーバントリーダーは、部下に権限を与えて能力を発揮させることを主眼におき、信頼感に基づく組織づくりをめざします。そこでは、公正さ、寛大さ、他者への思いやりなどの価値観が尊ばれます。これは平等主義的な狩猟採集民の価値観と不思議なほどよく似ています。

皆さんのなかには「自分はリーダーになる柄でない」と思っている人がいるかもしれません。しかし、このようなスタイルだったらリーダーシップを発揮できると思えるのではないのでしょうか。むしろそのような人のほうがリーダーに向いているのかもしれない。

卒業される皆さんが、サーバントリーダーシップという言葉をもっと正しく理解してくれて、将来それぞれの分野でそのようなリーダーシップを発揮されることを期待して、門出にあたってのはなむけの言葉といたします。